

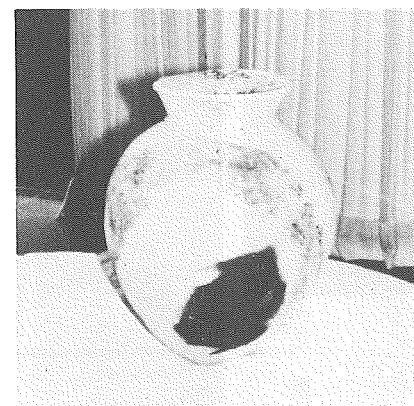
農業史



大豆打ち風景（農具はアイコ・カラサオ）



埋蔵文化財発掘調査



徳富権現堂より出土した
古墳時代の土師器

置や規模を確認する目的での発掘調査が進められている。
年を追うに従い、圃場整備事業の進捗に伴い、町内各地区で、いろいろな埋蔵文化財が発掘されることである。
う。
これら埋蔵文化財の発掘調査は、有明海に近い地区で、私たちの先人の生活を解明するために、学術的にも重要なことである。

一 諸富町農業のはじめ

(一) 佐賀平野

佐賀平野の成り立ちは、極めて新しい沖積によるもので、その開発は弥生期以降とされ、米食人口の増加に比例して耕地が拡がっていったといわれる。

昭和五十七年（一九八二）、徳富権現堂地区から、農地の基盤整備事業に係る発掘調査によって、弥生後期（約一七〇〇年前）の種々の土器が出土した。

この先人の住居跡から、少なくとも、自給自足の農業が諸富町の此の地に営まれていたと考えてよい。今日、碁盤の目のように、農地が整然と区画され、果てしなく拡がっている沃野に、黄金色の稲穂が波打ち、鮮やかな原色のコンバインが、縦横に往き来するさまを、眺めるとき、この肥沃な沖積層の重粘土に、新天地を求めて南下し、はじめて鋤を振りかざした農民は、一体、どんな人達であつただろうか。

あばれ川の異名をもつ千歳川（筑後川）の氾濫とたたかい、人類が農業を始めた時以来、受けたような鳥害、虫害と、それに野草の繁茂に悩まされるなど自然との戦いがくりかえされたにちがいない。

彼らがどんな農業を営み、どんな生活をしたのか分からないが、隷属的農民として、封建農民として、がんば

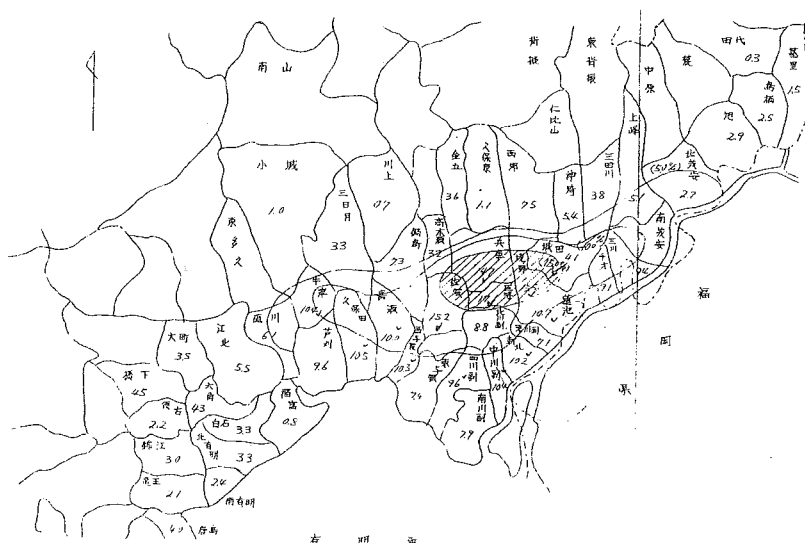


クリーク風景
 ジュブ棚（小屋）の上にかささがと
 まり、水面にはタイワンモガラ（ほて
 い草）が茂る

ており、田から籾、肥料（こやし）、稲わら、裏作の収穫物から麦わらなどの嵩ばる物の運搬に、農家の舟が昭和の初めまで往き来したのは、クリークの利用上、特記に価する。

「ホイ」をクリークと呼ぶことは、もはや全国的傾向で、このクリークという英語のもつ意味が「ホイ」の実態を表現している。

図1 佐賀平野旧町村別の用水堀（クリーク）比率（%）



佐賀県クリークの農業生産に及ぼす調査

がらめの枷を背負い、肉体を極限まで酷使し、苦難の道を選避けることなく黙々として働きつづけ、今日の輝かしい農業の礎を築き上げたにちがいない。

その足跡を振り返るとき、先人への厚い感謝と歴史への郷愁を覚えるのである。

(二) クリーク（ホイ）

日本一の干満の差（五・五びー六び）をもっている有明海は、堆積作用と河川の土砂運搬作用とが相まって、河海性沖積の干潟が発達し、自然陸化及び干拓されて、佐賀平野が成立し、そして、今もなお、有明海の海岸には年々七セー一五セの堆積がくり返えされ、背後地の排水性を悪くして、排水を図るためにも、干拓をし、クリークを作らねばならない宿命をもっている。

広大な平野に水を溜め、農業用水と生活用水とを確保し、併せて水害を防ぐために水路を開くことは、水田を開発し、新しい農村を作ることであった。

この巨大な水利体系は、凡そ三六〇年間変化することなく農業を守りつづけ、クリークからの揚水手段が、非能率な「打桶」から安永年間（一七七〇）における画期的な「足踏水車」となり、ついで大正十一年（一九二二）の飛躍した「電気機械灌漑」へと変遷してきても、樋管がコンクリートになり、昭和三十二年（一九五七）に北山ダムが完成するまで殆ど変化せず、佐賀平野の農地をうるおして、其の使命を果たしつづけた。

クリークが筑後川の河口へ出る寺井樋門に至る新川は川幅も広く、野町部落は農家の裏に舟が着くようになって

しかし、この「ホイ」という言葉には、封建農民が駆り出され、全くの人力で掘り上げて作った、汗の結晶であることが意味されている。

今日まで、その恩恵を受けつづけている農業者の、決して忘れてはならない言葉である。

二 稲 作

栽培イネの伝来が南方からという南方説にしても、中国の華中を通り、朝鮮半島を経て北九州へ伝わったという北方説にしても、九州は至近距離にあり、日本で最初に稲が栽培されたのは九州であることは間違いない。

栽培がもつとも安定し、しかも作物の中でもつとも生産力の高い稲作は、急速に拡がっていった。

いつの時代の世にも、稲作の振興は国の最重点政策であった。

目ぼしい産業のない佐賀県で稲作は最も重要なもので、とくに稲作に適した沖積土壌の平坦地帯である。佐賀県は全国的に生産力の高い県であり、諸富町は県内で単位面積当たりの最も高い収穫量を誇る地域である。

それだけに、農民の稲作に対する依存度も極めて高いものがある。その反面、水田裏作である畑作物に対しては、排水性が不十分で適地でないことと併せて、意欲は低調である。

僅かに、麦類、菜種、蚕豆などが作られるが、面積も延びず、休閑地になっていることが少なくなかった。

最近ようやく、ビール麦（二条大麦）と、ビニールハウスの普及とともに、水田裏作に園芸がとり上げられつつある。

(一) 品 種

いまも昔も農民の豊作を祈る気持に変わりはない。特に農業経営の中に大きな比重を占める稲作の豊凶は農民生活の吉凶と直結するものである。

従って、収量を左右する第一の要因となる品種に対する関心は、異状なほど強い。

神埼町の仁比山の山王神社の大御田祭に、撒かれる種籾を拾って帰り、自分の種もみに混ぜて苗代に蒔くと、病気や虫に強く豊作になるという信仰も、つねに豊作を祈願する農民心理に外ならない。

安永九年（一七八〇）から明治末まで、一五三年間の稲作の坪刈帳が東松浦郡相知町に伝っている。（早川孝太郎、佐賀県稲作坪刈帳）

その中で、異名同種、同名異種、とり混ぜてあることも考えられるが、一三八種という考えられぬほどの多数の品種が記載されて、農民の品種に対する、執ような期待と祈りの跡がありありと認められる。

種
クリーク地帯では、水利と過酷な労働の制約の下で、早害と水害を避けるほかに、殆ど恒常的な、しかも最大の農業災害であった、三化めい虫害回避のための危険分散対策として、早、中、晩稲が栽培された。（二期作といわれる）